

コラム・GO! GO! エレクトリシャン No.72

※(本紙ブログサイト《GO! GO! エレクトリシャン》にもぜひアクセスを!)
アクセス・キーワードは GO! GO! エレクトリシャンで

近年頻発する大型台風や異常気象などに対抗する人間の英知 電化の歴史とともに急速に発展した気象学と気象観測技術 !!②

放射した電磁波の反射状況の分析で気象観測する気象レーダーは、電波を活用した観測装置。その開発の歴史は1940年代初頭から世界的に、急速に盛んになっていった。それは同時に、大量の情報をコンパクト化して送る電子通信技術と表裏一体になった技術革新で、背景にはいうまでもなく、第2次世界大戦が始まる直前だったという世相がある(太平洋戦争の開始を告げる真珠湾攻撃は1941年12月)。

そして気象レーダーが平和利用の気象観測に大活躍をするようになるのは第2次大戦終了以後、1950年代に入ってからのことだった。

気象衛星のなかった時代には、気象レーダーはなるべく標高の高い山頂などに設置されたが、日本においては1932年～2004年まで続いた富士山測候所での観測がそれにあたる。

富士山測候所への気象レーダー設置は東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年。1959(昭和34)年9月に発生し、甚大な被害をもたらした伊勢湾台風が直接のキッカケになり、精密な気象予測の必要性が高まった結果の設置とされる。

富士山測候所での気象観測は1999(平成11)年まで続くが、その時点では1977(昭和52)年頃に初めて打ち上げられた国産気象衛星「ひまわり」による宇宙からの観測も、初代から5代目の「ひまわり5号」の時代になっており、富士山測候所の観測以上に精密なデータが得られるようになっていた。

しかし、その間の富士山測候所の観測業務が世界的にも高い評価を得ていたことは、廃止決定翌年の

2000(平成12)年にIEEE(米国電気電子学会)から《IEEEマイルストーン賞(米国電気電子学会が電気・電子技術および関連分野における歴史的偉業に対し認定)》を授与されたことでも明らかだろう。

ところで、富士山測候所の歴史を語るうえで忘れてならないのは、幕末期に生まれた気象学者・野中到である。福岡生まれの野中は日本最高峰の富士山頂での観測こそが、日本の気象学発展の礎になる事業だと発意し、富士山頂への測候所設置をライフワークと定めた。そして1895(明治28)年夏、富士山頂に測候小屋(気象観測所)を設置。妻・千代子さんとともに越冬観測を試みて、一躍有名になった。

野中夫妻の情熱は1936(昭和11)年の中央气象台による富士山頂気象観測所設置に繋がり、さらには前述のように1964(昭和39)年の富士山測候所への気象レーダー設置へと繋がっていく。

その間の1923(大正12)年2月には、まず妻・千代子さんが死去。1955(昭和30)年2月には野中到が死去するも、夫妻の遺志は連綿と後進に引き継がれていったのだった。

そして今、気象観測は多様化の時代を迎えている。地上気象観測、海洋気象観測、高層気象観測、衛星観測とさまざまな手法が、いずれもデジタル技術の発展とともに、高精度の観測が世界中で行われている。地球温暖化の進捗などで、新たな観測技術の出現が求められてもいるが、人間の歴史ある限り、気象観測の発展史は続いていくはずだ。